

世界は舞台，人はみな役者

清 本 修 身

挨拶

本日は私の最終講義ということで、貴重なこの時間をさいていただきました。もとより本来の教員でもないと自覚しながら、この5年間、本学部に奉職してきた身にとって、やや二の足を踏むような機会であり、戸惑っておりますが、それでも、一種の慣例、義務ということですので、この講義をお受けしたしだいです。通常、こうした機会は大先生方が長い学究生活を通し、その学問的な業績を語り、若い皆さんを鼓舞し、刺激するものであると理解していますが、私にはそんなことを語る何の資格もありません。また、個人的な人生を振り返ってみても、皆さん方に自慢できるようなこともありませんし、ごくごく平均的な物語しかありません。ということで、それをまず承知していただいて、若干の私の新聞記者時代と転職後のわずか間の教員生活の感慨を述べつつ、皆さん方と少し時間を共有したいと思います。

ジャーナリズムの記録性

私の新聞記者生活は約37年間におよびますが、おおむね特に優秀な記者であったわけでもありません。よく「なぜ記者になったのか」と若い方々に聞かれますが、それも今から思えば、他の分野はあまり視野になかったにせよ、やや漠然とした情緒的なものでした。私の高校時代の50年末から60年代初めごろ、日本社会にもテレビが急速に普及し、NHKのドラマ番組で「事件記者」というのがあり、よく見ていましたが、一般の会社生活と違い、仕事の厳しさが窺えるにしても、なんとも自由で、格好いいなと感じ、それが将来の職業選択の大きなきっかけになったように思います。しかし、事件記者にあこがれたわけでもありませんので、記者生

活の第一歩としてだれもが経験する地方支局の警察担当時代は本当に戸惑うことばかりでした。新聞の命は、生きのいい「特ダネ」だとデスクからよく叱咤されましたが、大きな事件を他社に抜かれた時、事件記者としては失格だなどつねに内心思っていました。ちなみに、マスコミ業界には特ダネとともに、「特落ち」という用語があり、前者は一社だけのスクープであるのに対し、後者は一社だけその重要なニュースを落としたことをいうのです。だから「特落ち」の場合は担当記者はさらに面目を失うことになり、デスクから雷が落ちることになります。これだけは何としても避けたいと思っていました。

ただ、この言葉は業界用語であり、ジャーナリズム活動の勝敗を測るひとつのパラダイムであるにしても、社会一般に通じる競争原理でもあるのです。そのように咀嚼して理解していただければ、よいのです。

駆け出しのころ、何とか大きな面子は失うことなく乗り越えてきたつもりですが、5年間の地方支局から東京本社に転勤になる際、事件を扱う社会部はどうしても嫌だと思い、国際報道の部門を志望し、運よくそこにもぐりこむことができました。当時としては新聞記者といえ、社会部記者が花形でしたから、国際報道はいわば傍流の世界でした。それでも私には大変居心地のよい世界でした。

広い国際社会の政治、経済、文化、社会事件など多様なテーマを追いかけるという仕事はまさに目の前の進行形の現代史に立ち会えることになるからです。新聞の社会的役割や商業的な価値については議論は多々ありますが、一番重要で、時代にかかわらず不変なことは「記録性」にあります。歴史を記録するという役割であります。むろん、これは言葉で表現するのは簡単ですが、実際には大変難しいことです。記録といっても、その価値は、後年読み返しても十分役立つものでなければならないからです。理想的なうたい文句に「歴史に耐える記事を書け」というのがありますが、そんなことはだれにもできることでないことは自明でしょう。それでも、一応の心構えや意気込みはそうあるべきなのです。

私は国際報道の分野で、約15年間、外国暮らしを経験し、赴任先は幸か不幸か世界各地にまたがりました。中南米、アフリカ、アジア、中東、米国、欧州と世界の多彩な国々を渡り歩き、多様な世界を垣間見ることができました。世界は先進国と途上国に大別されますが、私の実感からすれば、人間の基本的な感情である喜怒哀楽はどこでも同じです。そんなことは当たり前ではないかと言われるかも知れませんが、でも現実的には、人間の生活感覚には常に一定の距離感があり、遠い地域と身近な世界とではだれでも反応は違います。この意識の境界をいかに飛び越えるかは皆さん方がこの学部で政治や経済、あるいは文化などの学問領域を通して学んでいらっしゃるのだと思いますが、私はあえて言いたいのは家族や友人などそれぞれに一番身近な人たちのことを神剣に考えれば、遠い世界の人たちのこともおのずと理解できるように

なるということです。社会の最小単位である家族の価値観を理解することが広い国際社会の理解につながり、それが最も重要であるということです。なぜなら政治も経済も文化もすべて人間の営為であるからです。逆説的にいうならば、そうしなければ、抽象的にはわかっても、切実に理解し、行動することは難しいかもしれません。

戦争の虚しさ

あまり思い出したくもない経験ですが、私は職業上、いくつかの戦争や内戦、紛争を経験し、自分の命の危険を本当に感じたこともありました。中東のレバノンという国に駐在していた1982年6月、隣のイスラエルが突然、レバノン侵攻作戦を展開し、首都ベイルートが空爆と目の前の地中海の沖合いからの艦砲射撃、そして首都を包囲した戦車による砲撃と三方面から猛攻されました。首都は瓦礫の山になりました。レバノンは当時イスラエルと敵対していたPLO（パレスチナ解放機構）、つまりパレスチナ・ゲリラの最大拠点になっていたからです。この軍事作戦は最も激しい期間がおよそ3ヶ月続き、その中で、仕事をしなければならなかった。連日の砲撃の轟音とともに生活し、ある時には支局兼自宅として住んでいた広いマンションの応接間とベランダを区切る大きなガラス戸4枚が数百メートル先に落ちた一トン爆弾の爆風で、粉々になりました。さすがに足が震えました。近くの地下避難所に何度も飛び込みました。マンションの部屋の中より、内部の階段の踊り場のほうが少しは安全だと思い、数時間そこに座り込み、携帯ラジオでニュースを聞きながら、過ごすこともありました。この期間、毎日のように断水、停電です。トイレの水はあらかじめ用意していたミネラルウォーターを使い、ダンプカー用の大きなバッテリーを用意し、その電力を使ってテレックスを動かし、原稿を東京に送っていました。（テレックスといっても、皆さんにはどんな機械かご存じないでしょうが、大型のタイプライターのようなもので、日本語の文章を紙テープにローマ字で打ち込み、そのテープを電話回線を利用して送ると、受け手の同じ機械のロール紙にローマ字が印字される。そのローマ字の文章を受け手が日本語に戻し、日本語の記事として新聞に掲載する）。

パレスチナ現代史の大きな傷跡となったベイルートのパレスチナ人の難民キャンプでの大虐殺事件もこの時、発生しました。PLOのアラファト議長以下、主要幹部はもちろん、多数の戦闘員が港から船に乗せられ、チュニジアなど近隣のアラブ諸国に追放されました。こうした運命のあと、88年、PLOは初めてイスラエルを承認し、テロ放棄も表明、90年代以降のオスロ合意などによるイスラエル・パレスチナの共存体制への新しい模索へと進んでいったわけですが、だが、いま皆さんが見ていらっしゃるように、まだパレスチナ独立国家の誕生には至っていませんし、むしろ、暴力の応酬は過激化し、混乱を深めているのが現状です。そし

てこのパレスチナ問題を核とした中東紛争のマグマはなお世界を揺るがす起爆剤であり続けています。

ジャーナリズムの世界には昔から「戦争は記者を鍛える」という言い方があります。多分、その通りだと思います。戦争というのは、人間に多大な悲劇をもたらすものですが、一方で、当事国のすべての姿、政治も経済も文化も、好くも悪くも、すべてが照らし出されることになるから、記者はそれと必然的に向き合い、懸命に分析することになります。そのことを言うのだと思います。これも表現を変えていえば、ジャーナリズムの世界だけのことではないでしょう。要は、人間は試練によって成長するのだ、と理解すべきなのでしょう。ただし、こういうことをいうと、いかにも暗い話になりますし、場合によっては好戦的な意見だと受け止められてしまう可能性もありますので、ひとこと経験の感想をいっておきます。戦争報道は、職業的にはやや華やかな活躍となっても、精神的には虚しさしか残りません。思い出したくもないといったのは、そういう意味です。戦争は取材者にも後遺症が必ずあります。同時に、平和の尊さは抽象論だけでは現実世界には通用しないのではないかということも実感しました。

独裁権力の悲哀

つまらない話を続けますと、カリブ海にハイチというかつてフランス植民地だった小さな黒人の島国があります。キューバの隣にある島国です。この国では親子二代続いたデュバリエ王朝と呼ばれた独裁政権が君臨し、その二代目の独裁者が国民の反乱で86年に倒されました。この独裁王朝の特異さは、黒人社会伝来の原始宗教を巧みに操り、秘密警察を使って国民を弾圧してきたことです。この秘密警察の存在はイギリスの著名な作家グレアム・グリーンが小説「喜劇役者」で描いたことでも有名だったのですが、ともあれ、その二代目政権が打倒された際、取材をしました。混乱收拾のため介入した米国の力に押され、大統領は最後に家族ともども、米軍が差し向けた軍用機に乗せられ、首都の空港からフランスに亡命しました。大統領の家族が乗り、また家財道具などを積んだ車の列が空港に到着した際に目撃した光景は忘れられません。小さな国の異常な独裁者のひとつの終幕ドラマでしかないのですが、権力の奢りとその末路の悲哀の構図が目の前に忽然と浮かび上がり、呆然とした感覚に襲われてしまいました。

確かこの同じ年には、フィリピンの長期独裁者マルコスも国外追放となり、さらに少し前の70年代末には、「王の中の王」といわれたイランの独裁者パーレビも国外追放されました。

これらの事件を振り返り、いま私が改めて強く想起するのは、冷戦終結当時にソ連のゴルバチョフ共産党書記長が東ドイツ指導者に対して言い放った、「歴史に遅れてきた者は、歴史に

罰せられる」という警句です。政治の民主化を求めて高まる国民の声，つまり歴史の新しい波に鈍感なまま対応できないと，その歴史にしっぺ返しを受けるということです。こんな歴史ドラマのアナロジーは古今東西，ふんだんにありますが，そのメッセージは何も政治指導者に限ったものではなく，企業経営者や他のどんな機関，組織の責任者にも通用できるのではないかと私は考えています。むしろ，皆さん方学生や若い世代の方々もよくその教訓を学び取り，これからの人生設計の参考にしていただきたいと思います。

価値観の対話と融合

ところで，この時間は私と奥田先生が担当し，外務省の外郭組織で，多様な国際文化交流の推進機関である国際交流基金（JF）のご協力を得て進めてきましたシリーズ講座「外国人研究者から見た日本」の最終編の授業でしたが，いま，とんでもない番外編となってしまいました。このままでは申し訳ないので，この授業に関連させるために，私の多少の知識や経験から考えた，いわば私的国際交流論をお話したいと思います。私的と断っておかなければならないのは，私には学問的権威などまったくないし，皆さんの参考になるかどうかともわからないからですが，私にはこんな経験があります。タイに駐在していた92年6月，その少し前にクーデターで政権をとった軍事政権に対し，国民の民主化要求運動が高まり，多様な市民グループが毎日のようにバンコクで街頭デモを繰り広げました。それに対して軍政は発砲し，多数が死ぬ，大変な流血事件に発展しました。

これだけだと途上国のどこにでもありますが，市民のデモ参加者に，タイ人の人権活動家と結婚していたひとりの日本人女性がいました。この夫婦はバンコクのスラム街で貧しい人たちの支援活動をしていたのですが，日本人女性は当時妊娠しており，もし，軍政に逮捕されれば，身体の安否が当然懸念されます。そこで，現地の日本大使館が一大決心をし，彼女をこっそり大使館の関連施設に保護しました。大使館は治外法権ですので，安全ではあるのですが，この行為はタイ政府からみれば，法的には内政干渉になる可能性もあるわけです。両国関係が悪化する重大な要因にもなるのです。つまり，国民と政府の対立の中で，日本大使館，つまり，日本政府は市民活動に味方したとも解釈できるからです。タイ政府が要求すれば，引渡しをせざるをえないかもしれません。さすがにタイ政府はそれほど強硬なことは一切しなかったのですが，このひとつの秘話は国際交流の厳しさをわかっていただくためにお伝えしたいのです。彼女は日常的にはスラム住民を支援するという気高い活動をしていたのでありますが，人道支援といってもその国の政治の政界と無縁でいるわけにはいきません。

ついでに言いますと，この流血事件ではタイ国民から大変な敬愛を受けているプミポン国王が最後に政府，反政府両指導者の調停に入り，王宮に両指導者を呼んで，和解を促しました。

国王はひれ伏す二人に対し、「あなた方の争いで一番損をするのはだれですか」と問いかけ、「それは国家です」と諭しました。この接見の光景はテレビ中継されましたが、このあと、翌日には騒乱の事態がたちまち収まりました。なんとも不思議な、信じられないようなことです。国王には憲法上、何の政治的な権力もありませんので、魔力が働いたとでもいうのでしょうか。むろん、そんなことはありません。それはこの国特有のことで先ほど言いましたように、国王に権力はなくても、国民の絶大な支持があるからです。このケースから皆さん方に「権力」と「権威」という問題も考えてほしいと思います。

余計な回り道をしてしまいましたが、本筋に戻って、私の言いたいひとつのことは、国際文化交流を考える際、その国の政治、経済、文化もしっかりと理解しておかなければ、いけないということです。文化という言葉で一般的に想定されるのは、文学や音楽、美術、映画などですが、むしろ今日の世界は政治や経済もシステム（制度）としてよりは、文化的な側面から分析する必要があります高まっているのではないかと考えています。グローバリゼーションの進展とともに、あらゆる分野でグローバル・スタンダードが声高に唱えられていますが、政治も経済も制度としては基本的に同じであっても、国によってその運営方法は違います。これが文化だと考えます。文化の形成に宗教は大きな役割をはたしているのですが、日本人は宗教問題は極めて苦手です。私も正直いって、あいまいな知識しかありません。しかし、私は文化とは大きな意味で、「価値観」だと思っています。だから文化交流とは単に文化の相互理解ということだけでお茶を濁してはいけない、ということです。国際交流はいわば価値観の対話にその本質的な意義があり、しばしば価値観は衝突し、危険な火種も内包した厳しい世界であるということも認識してほしいと思います。バンコクの日本人女性のエピソードからそれを感じ取っていただきたいと思う次第です。

こうしてみると、政治的な交流も経済交流も文化交流も不可分の一体です。経済の世界では多様な製品、商品やソフトウェアなどが国際的に流通し、対外的な投資も活発に行われています。この製品取引額や投資額も経済的には数字で計算されますが、製品自体には利便性や文化的価値などの一定の思想などがそれぞれに応じて含意されていると考えています。日本はかつて超小型のトランジスタラジオやウォークマンなどの製品を開発し、その文化的な価値が認められて、世界市場を席卷しました。いまは多様なコンテンツ産業が大きな威力を發揮しています。アメリカのディズニーやマクドナルドなどの産業も経済であるとともに文化であることはすぐにお分かりになると思います。マクドナルドというファーストフードはあわただしい時代に生きる人々の、ライフスタイルという文化的価値に合致したからこそ、あれだけの世界市場に進出できたのでしょう。

歴史に学ぶ

しかしながら、価値観には普遍的なものもあれば、時代を反映して移り変わるものもあります。国家や個人でも価値観の重心は異なります。この錯綜する価値観は国民社会、また広く国際社会全体を不安定にしています。グローバリゼーションとかグローバル・スタンダードと騒がれても、それぞれが背負った文化はそう簡単にいくつかの共通項として収斂するものではないし、むしろ拡散する勢いのほうが強く窺われます。この漂流する価値観は国家レベルや個人レベルでアイデンティティ探し、自分探しの旅に誘う現象を生み、時代はますます不透明にもなっています。「文明の衝突」論もこうした視点で書かれたものだと思いますが、「自分探し」は国家も個人も歴史によってしか確認できません。そこで強調したいのは国際交流にかぎらずどんな領域のことを学ぶにしたって、歴史をしっかりと習得することが不可欠であるということです。文化は人間の体験の累積による歴史によって形成されます。文化は歴史であり、歴史は文化であるといえます。とすると、異文化理解というのは、壮大な学術的作業であるとともに、それぞれにとっての安全保障観さえ伴う大きな精神作業だと思います。

文化交流とは従って価値観の対話、融合ということになるのですが、それは政治的な成果にもつながります。かつてオーストリアのハプスブルグ王朝は二人の王女、マリー・アントワネットとマリー・ルイーゼをフランス・ブルボン王朝のルイ16世とナポレオンにそれぞれ嫁がせました。平たくいえば、政略結婚ですが、強大な二つの勢力が力の衝突を避け、欧州の平和秩序を守るためのものでした。この両王女とも嫁ぐとき、フランス領に入る直前で、フランスのファッション文化の衣装に着替えるよう命令されました。それぞれの文化を通した価値観を融合し、政治的な成果を達成する難しさを象徴するような話です。いまどきはこんなことはないのですが、異文化と政治の関係を考察する際には十分参考になる話だと思います。

日本とヨーロッパの文化的関係史には、この講座の講師としてきていただいた先生が日本の浮世絵や美術工芸品が19世紀後半から今世紀初頭にかけて、いわゆる「ジャポニズム」として欧州の美術界に大きな影響を与えたという話がありました。

欧州はご存知のように今日、数々の統合が進展し、巨大な政治、経済圏として新たな地位を誇っていますが、この欧州統合の歴史にも、ひとりの日本人女性の奇縁が存在します。これはよく知られた物語ですが、第一次世界大戦前後に欧州統合の先駆的な啓蒙運動、汎ヨーロッパ運動をしたハプスブルグ帝国末期（オーストリア・ハンガリー二重帝国）の貴族、リヒャルト・クーデンホーフ・カレルギー伯爵の母親が青山光子（本名ミツ）という日本人女性であるという奇遇です。東京で骨董商を営む青山喜八の娘である青山ミツは、外交官として1892年に日本に赴任したハインリッヒ・クーデンホーフ・カレルギー伯爵と知り合い、結婚し日本で二人の男子を産みますが、その次男がリヒャルトです。彼女は後に伯爵の帰国に伴い、領地とお

城のあるハンガリーやウィーンで過ごし、さらに数人の子供を持ちますが、日本で産んだ男子にはそれぞれに日本名をつけ、リヒャルトには栄次郎という日本名もあります。欧州でミツコは夫の死亡に伴う遺産相続訴訟など苦勞の多い数奇な運命をたどりますが、一方、パリやウィーンの社交界にも華麗に登場しました。

ちなみに、フランスの有名なゲラン社の香水に「ミツコ」と名付けられた香水があります。この香水名はあるフランスの小説の主人公の名前から採ったとされていますが、伯爵夫人ミツコの存在にも影響を受けたと言われています。女子学生は近い将来、この香水を楽しむことになるかもしれません。

また、この地に引き寄せて言えば、青山光子は京都出身で書家、陶芸家、料理人などとして多彩な活躍をした異才、北大路魯山人と交遊のあった古美術界の大立者青山二郎の親戚で、青山二郎の母親と従姉妹同士です。

明治時代の日本人女性の国際結婚のこんな物語をしたのは、日本と外国との国際交流には20世紀はじめのころ、西本願寺の門主、大谷光瑞が仏蹟発掘のために行った西域探訪や遠いパナマ運河の建設に貢献した技術者など、ほかにも多数の興味深い歴史上の日本人が存在し、そうした歴史をたどることも、身近にこの分野の勉強ができるのではないかと思うからです。

もうだいたい無駄話をしてしまったような気がします。でも、大学教育では、しばしば「CRITICAL・THINKING（批判的思考）」が重要だといわれています。だから、私はいま、自分自身の話を「CRITICIZE」（批判）しているのです。ということでご容赦ください。教員生活の感想をひとことで述べますと、われわれの時代にはあった「教壇」という言葉の持つやや神聖な感覚は今日、もはや消え去ったのではないだろうか、という思いがあることです。情報化社会の中で、あらゆる「知」はすでに大衆化、民主化されているのだと解釈しているわけであり、ややわけのわかりにくい言い方になりましたが、教育とは元来「対話」なのだと勝手に会得したのが、私の感想です。

最後にこの5年間、学部の諸先生方に暖かく迎えられ、親しくお付き合いさせていただきました。また、若い皆さん方も楽しい月日を過ごすことができたことにここで改めてお礼を申し上げます。私は皆さん方と友達感覚で接してきました。というのも、皆さん方に何の学問的な啓発もできないと自覚していましたから、それしか手がないと考えたからであります。教室よりは、廊下や庭先などで、折に触れ、皆さん方と雑談しながら、その若いエネルギーをもらって、ひそかに精神的な若返りを図ってきました。そういう意味では大学生活は、なんとも贅沢な空間と時間でした。

私はこうしたふれあいを通し、皆さん方なら今後社会人としてどこでも活躍できるのだらうと確信しています。そこで、皆さんにイギリスの文豪シェクスピアの数々の名作に関係した

世界は舞台，人はみな役者（清本）

ひとつの言葉を贈りたいと思います。

「世界は舞台，人々はみな役者（お気に召すまま）」——という言葉です。

皆さん方が広い視野に立ち，国際社会の多様な分野で名役者となり，それぞれの豊かな，ドラマに富んだ人生物語を演じていかれることを期待しています。

ありがとう御座いました。

平成20年1月15日